

先人の知恵から

4

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

皆さんは日々どのくらい諺や格言などを使うだろうか？会話の中でも中々出てくることは無いだろう。我々大人が使わなければ、子どもたちが覚えることは無い。子どもや保護者との面談では、出来るだけ諺を使うようにしている。少しでも伝えていければと思って書いている。

今回は次の5つ。

- ・ 過ちてあらたむるに^{はばか}憚ることなかれ
- ・ 荒馬の^{くつわ}轡は前から
- ・ 嵐の前の静けさ
- ・ 粟一粒は汗一粒
- ・ 案ずるより産むがやすし

<過ちてあらたむるに^{はばか}憚ることなかれ>

過ちを犯したことに気付いたら、体裁や体面などに囚われず、直ちに改めるべ

きと言う戒め。出典は「論語」の学而。

子育て中の親がよくやってしまうのが、自分の過ちを認めない事だ。子どもが小さい時はともかく、小学校高学年ともなれば、知識も増え、親の過ちに気付くようになるし、その指摘も厳しくなる。子どもは思春期になっているからこそ、親はまだ何とか自分の力を利かせたいと思う。子どもに馬鹿にされないようにと意地をはり、誤魔化し、自分の過ちを認めようとしぬい。

先日「隠蔽捜査」と言うテレビドラマで、警察官僚の父親が息子の麻薬使用を知り、警察に自首することを勧め、自分の進退も考えると言う話があった。良くある話なら、息子の罪を隠し、知らんぷりをするだろう。それが父親自身を守る

から。子どものためと言いつつ、結局は自分の事を重視してしまう。親のエゴだ。

社会でも食材偽装やデータ改ざんなどの過ちのために、会社の幹部がテレビで謝罪会見をしている。このように、過ちと知りながらも直ぐに正さなかった結果、世間を騒がせるような大事件に発展し、社長が辞職したり営業停止になったり最悪の結末になった例を見てきた。誰もが、「何故もっと早くに過ちを正さなかったのだろう?」「誰かが正す勇氣を持っていればこんなことにならなかったのに・・・。」などと思っただろう。しかし、そうはならないのは何故か?そこには「事なかれ主義」や「自分の代には穏便に」と思う経営者、上層部の思惑が働き、現場で不安に思っている部下・職員の気持ちを受け止めようとしないことや、前任者がやったことの責任を取りたくなくて、見て見ぬふりをし、悪い事とわかっていながらも続けてしまったと言う事もあるだろう。

大人社会がこのようなことをしているのを子どもたちはニュースなどで知っている。そのことを前提に子育ての場面でこの諺がどのように生きてくるだろうか?

子どもは様々な過ちをするものである。悪いこともする。軽いのりで万引きをしてしまう子、いじめをしてしまう子、つい友達のを持ってきてしまう子。嘘をつき、誤魔化し、更にその嘘の上塗りをする子。

そんな子ども達に親はどんな対応をするべきだろうか?

親には三通りいる。子どもを100%

信じて守ろうとする親、子どもを半分信じ半分疑っている親、そして子どもを全く信じず、端から「お前が悪い」と怒鳴り付ける親だ。

思わず犯してしまった過ちや一旦ついた嘘を、「〇〇ちゃんはそんなことはしないものね!」などと親に100%信じられてしまうと、「自分がやりました」とか「嘘でした」とは言えなくなる。しかもこういう親は周りに攻撃的になり易い。「うちの子に限ってそんなことは絶対あり得ない!」「濡れ衣だ!」「証拠はあるのか!」などと言いだす始末。親のこんな動きを見れば見る程、子どもは真実を語れなくなり追いつめられるだろう。万が一、後で子どもが親に真実を語ったとしても、今更振り上げた拳を降ろせず、子どもに嘘を突き通させる親までいるくらいだ。つまり親自身が謝れないのである。

正反対の位置にある「全く信じない」親はどうか。本当に悪いことをしてしまった場合は叱られて当然だが、やって居ない場合が問題となる。いくら「やって居ない」と言っても信じてもらえないため、結果的にやってもいないことを「やりました」と認めることになる。この屈辱はずっと尾を引き、大人になっても親への恨みとして語られることさえある。

真ん中に位置する「半信半疑」の親、つまり「子どもって嘘をつくことも、過ちをおかすこともある」と認識している親の場合、子どもへの対処も、「もしかしたら」と言う関わり方ができ、子どもは早い段階で謝れたり、罪悪感で様子がおかしくなったりして過ちや嘘がばれてし

まう事も多いだろう。

子どもの過ちを正す上では、要するに親が、子どもを客観的に見つめることが出来ているか否かにかかってくるのだと思う。

そして、子どもに事が大きくなる前に過ちを認め、謝ることを教えるには、親自身が潔く、早期に過ちを認め、謝る姿を見せることが必要である。

間違っただ行動は変えればよい。過ちを犯した子どもを叱る際、子ども自体を否定するのではなく、**その行動が間違っている**と叱ってあげられる親であってほしい。行動はいくらでも変えられるが、人間そのものはそう簡単に変えられるものではないし、人は誰でも自分自身を否定されることは受け入れたくない。親が自ら見本を見せつつ、子どもたちに過ちを早期に正す事の大切さを伝えて行けば、昨今マスコミで取り沙汰されているような事態はいずれなくなるのではと思う。

英語では・・・

It is never too late to mend.

(行いを改めるのに遅すぎると言うことはない)

<荒馬の轡くわは前から>

困難な問題にぶつかったときは、真正面から堂々とぶつかるのがよいということのたとえ。轡とは馬を制御するために馬の口にくわえさせる金具のこと。

荒馬に例えては申し訳ないのだが、思春期に暴れてしまう子ども達、いわゆる家庭内暴力の場合の対応は、この諺によくあらわされていると思う。

子どもは全身を使って暴れ、訴えている。「助けて」と。しかし、荒馬のごとく暴れるために、親は逃げることだけを考えてしまう。荒馬にしてしまったのは誰か？その責任も負おうとせずに、化け物扱いをし、逃げ回る。そんなことで荒馬が収まる筈もない。益々暴れるだけだ。

荒馬の轡をとるには、真正面から向かわなければとれないのと同様に、暴れる子どももしっかり真正面から向き合えば早くに抑える事が出来るだろう。しかも、親が今まで子どもに対しどう向き合ってきたかを振り返り、反省し、謝ることが必要となる。

一体今まで、自分の子供にどのように接してきただろうか？良い子を押しつけていなかっただろうか？暴力で押さえつけてこなかっただろうか？甘やかし過ぎて来なかっただろうか？親の都合で子どもの感情を無視し、振り回してこなかっただろうか？子どもの話をちゃんと聞いてきたか？良いところを見つけられず、否定ばかりしてこなかったか？子どもが荒馬に変身する理由がここにある。

勿論親だって人間だし、完璧な親などいない。できそこないの親で良い。それを認められれば良いのだ。

最悪のパターンでは、警察の世話になったり、児童相談所に一時保護されたり、入院になったりする。そんなことになる前に、親として未熟な自分を見直し、反省し、そして子どもの叫びをしっかり聴いてあげる

ことが向き合うことになるだろう。轡をとって暴れが治まったら、引き回したりせず、轡そのものを外して、ある程度の枠の中で自由にさせてあげると良いだろう。思春期はコントロールしようとし過ぎないことも大切である。

＜嵐の前の静けさ＞

大きな事件や異変が起こる前の一時的に訪れる不気味な静けさのこと。暴風雨が襲う前、一時的に雨や風がおさまって静かな状態になることから、不安を感じるような、不気味な静けさをあらわす。

この言葉が直接子育てに繋がるというものではないかもしれないが、筆者が子育て中、度々この言葉を使ったので載せることにした。

筆者の子どもが様々ないたずら（本人はそのつもりではないが）をした時、それが発覚する前の穏やかな時間を思うと正に「嵐の前の静けさ」なのである。

幼い子どもがどこかで静かにしている時ほど要注意。トイレの水で遊んでいたたり、トイレトロールを引き出していたり、口紅などの化粧品で遊んでいたたり、米をばらまいていたり……。思い出せばキリがないほど沢山の、大人にとって迷惑な遊びをしてくれた。子どもにとってはこの上なく楽しい遊びなので、静かに集中して遊んでいる。後には笑い話になるが、その時は大変な騒ぎになることも多い。

こんな微笑ましい話とは違い、もう少し

大きくなると、やけに良い子を演じる時も要注意だ。いつもは親の言うことなど中々聞かないのに、自分から率先してお手伝いをするなどは、何かおねだりか悪いことをしてしまった後ということも多い。「虫も殺さない良い子」が裏でとんでもないことをしているなどという例もある。

穏やかな日と言うのは子育て中は長続きせず、必ず嵐もやってくると覚悟しておけば、慌てることも減るだろう。

英語では・・・

After a calm comes a storm. (嵐の後には嵐が来る)

＜粟一粒は汗一粒＞

農作業の苦労をあらわしたことわざ。粟一粒を作るには、農民の汗一粒が流されているという意から。

筆者が子どもの頃は、粟は流石に食べない時代だったので「お米を一粒作るのにお百姓さんが汗水流し、苦労している。だから一粒でも残してはいけない。」と教えられたものだ。しかし飽食の時代に在って、食べ物を残すことに罪悪感がなくなっている。給食でもたくさんの食べ残しが出るし、賞味期限の問題で捨てられる食べ物も多い。

粟一粒作るのにも一生懸命頑張っている人がいると我々大人が感謝し、食べ物を大事にしていく姿を見せていかねば、次世代を作る子どもたちは、もっと食べ物をぞんざいに扱うことになるだろう。

食については、もっと気をつけなければならぬ時代にもなった。肥沃だった土地は、何度も収穫を繰り返し、肥料で足されるミネラルが限られているため、土地そのものに含まれる栄養素が減っている。その結果作物に含まれるミネラルも当然減る。匂いや味が薄くなった野菜には栄養素も少ない。もっと栄養素のある野菜をという動きも出てきた。

一方農業は人気もなく、後継ぎがおらず農業をやめたという話も聞く。作物を育てるのは大変だ。肉体労働だし、土をいじり、虫や病気と戦い、よりよい作物にするため文字通り汗水たらす。その割には経済的にさほど潤うわけではない。お金に執着する人や、都会的な洗練された生活を夢見る若者には向かないのかもしれない。もしかしたら、我々大人が農業は大変だと言う事ばかり伝え、農業の楽しさを伝えて来なかったことも、若者を農業から遠ざけてきた原因かもしれない。しかし、農業は大事な産業である。野菜や米無しで、ミネラルやビタミンなどの栄養素を全て錠剤で摂るような生活をだれも望まないし、日本人にはやはり米が必要だ。

最近農業高校の漫画が流行って、農業に携わろうと考える若者が増えたと聞く。喜ばしいことだ。決して楽ではない仕事に敢えて就くには大変な覚悟がいるだろう。それでも農業に携わったり、畜産に携わったりする若者がいることに、日本の未来の明るさを感じる。粟一粒は汗一粒というこの諺が、反面教師として働いて汗をかくことの楽しさに繋げてくれると良いと思う。

<案ずるより産むがやすし>

始める前はあれこれ心配をするものだが、実際にやってみると案外たやすくできるものだというたとえ。お産する前は本人も周囲の人も色々と心配することが多いが、終わってみると案外たやすく済んでしまうものであるということから、出産に限らず、物事は事前にあれこれ思い悩むよりも、実際はそれほど難しくないとということ。

あまり取り越し苦労をするなという慰めの意味で使われることが多い。

「案ずるより産むが易い」ともいう。「産む」は「生む」とも書く。

この言葉を使う頻度が以前より増した。どうも最近の親も子も全般的に不安が強く、あれこれ悩み過ぎる傾向がある。まだやってもいない事の結果を心配し、前に進めなくなってしまうのだ。

先日も小学校6年生の子に将来何になりたいかと聞いたら「何もない」と言う。「好きな事とかないのかな？」などと話していたら、「将来に夢を持って期待して、叶わなかった時にがっかりしたくないから、最初からそんなことは考えたくない。」と言いだした。「夢も希望もない」状態＝「今さえよければよい」状態である。

最初からだめだった時を考えたら、誰でも何もする気は起きないだろう。子どもでもっと夢にあふれ、希望にあふれているものと思っている人も多いだろうが、そうでもないという現実がある。

なぜこの子はそのような事を言うのかと

言えば、親に先読みされ、夢や希望を潰されてきたからである。大人が子どもの夢や希望を潰してしまうのは、大人自身が自分の夢を信じられなかったり、現実の厳しさから子どもが辛い思いをしないようにと言う親心からだろうが、子どもが夢や希望を持つことは応援してほしいものだ。大人になっても夢をもち、叶えて行く人はたくさんいる。夢をただの夢として終えてしまうかどうか、その人の努力次第である。子どもも大人も夢を見ることが、明日のエネルギーを生むと思うのに、多すぎる情報が潰してしまうので、子どもも大人もエネルギーが下がってしまっている。

何かする前から心配をし始めたらきりが無い。心配は心配を呼び、不安が不安を呼ぶ。考えることも大切だが、考える前にやってみることも大事だ。失敗したって良いではないか。失敗を許さない風潮のある社会では、人々をより慎重にさせてしまい、それが子どもたちにも伝搬している。

子どもの世界を守り、子どもの夢や希望を守り、そして大人である我々も夢や希望を持って、前を向いて歩くことから始めればよいではないか。落ちるから飛行機に乗らない、つり橋は渡らない、事故を起こすのが怖いから車の免許は取らない、失敗するのが怖いから先頭に立って行動を起こすことはしないなど、ナイナイづくしは辞めよう！成せばなる！！

英語では・・・

An attempt is sometimes easier than expected. (やってみると、思っていたより易しいことがよくある)

今回はここまで。